



大田区探歩 〈9〉

番外編

私の目の前に昭和 30 年 3 月発行の大田区の区分地図がある。縮尺は 1/15000、定価 70 円。

当時高校生だった私が初めて購入した東京の地図だ。

横須賀市の住人である私が何故大田区の地図を買ったのか。当時アマチュア無線局を開局していた私が、大田区の局と交信する事が多かったからだろうと思う。

交信しながら地図を眺め、相手局のロケーションを確認し、それを話題にしたりしていた。

その当時は、後年自分が大田区と関わりを持つようになるとは夢想だにしなかった。

閑話休題、件の地図を具に見てみると町名が現在と随分違っているのが目につく。

例えば蒲田地区は現在蒲田、東蒲田、西蒲田、南蒲田それに新蒲田に区分されている。

当時の地図では、JR蒲田駅の東側に蒲田本町、仲蒲田、東蒲田という風に蒲田の表記がある町名が並んでいるが、駅の西側、現在西蒲田及び新蒲田という町名になっている地域には蒲田と付くところは一つもない。

ではどんな町名になっていたかといえば、女塚、蓮沼、御園それに道塚町である。

現在学校や神社名にその名残がある。

これは蒲田地区に限ったことでなく、大森や池上をはじめ他の地区も同様である。

大田区ばかりでなく、地名が時代とともに変わっていくのは仕方ないことだが、由緒ある

地名が消滅してしまうのは淋しい。

更に地図を眺めてみると、現多摩川線の「武蔵新田駅」の側に慶大グラウンドという表示がある。また新田神社の近くに慶大野球部合宿という文字がある。

このことには随分前に気がついたのだが、あまり関心がなくそのまま忘れていた。

今回本稿を執筆するに当たって、少し調べてみたら色々面白いことが分かってきた。

慶応義塾大学が現在の千鳥二丁目に土地を購入して運動場（主として野球場）をオープンしたのが、1926 年（大正 15 年）のことだった。

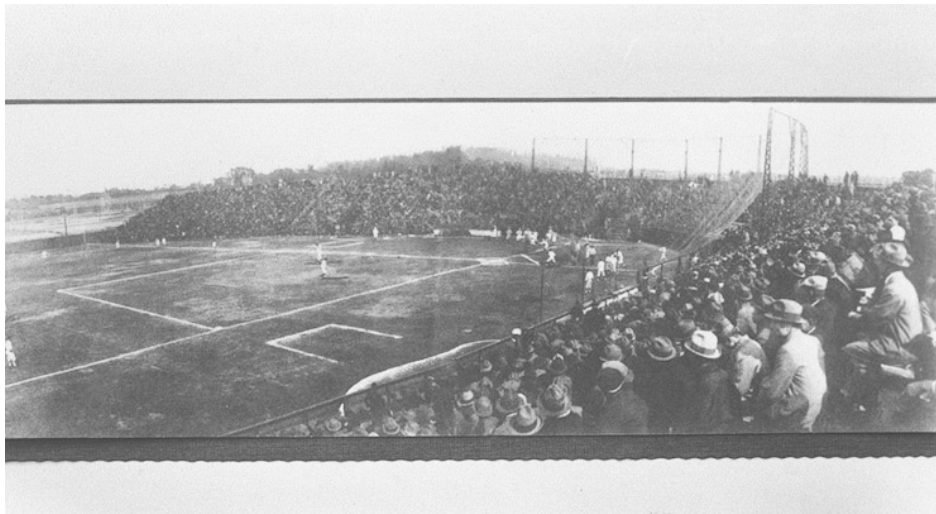
面積は約 14000 坪というから、今の東京ドームと同じくらいの広さだ。

このグラウンドのオープンと時を同じくして、現在の池上線の「千鳥町」駅の前身である「慶大グラウンド前」駅が開設された。当時は池上電気鉄道という会社がこの線を経営しており、1936 年（昭和 11 年）に現在の東急電鉄に買収されたのに伴って、「千鳥町」と改称された。

グラウンドは「慶大グラウンド前」駅と「武蔵新田」駅の間であって、両駅からほぼ同距離にあった。慶応ではここを「新田球場」と称していた。

日本のプロ野球が発足したのは 1936 年で、それまでは野球といえば学生野球、とりわけ東京六大学野球に人気が集まっていた。

この新田球場において、早慶戦をはじめ公式戦が行われたこともあるという。



当時の新田球場



東急池上線 千鳥町駅



グラウンド跡



慶応合宿所跡

ここは蒲田の松竹撮影所から近いので、女優さん達が見物に訪れることもあった。

その中に若き日の田中絹代の姿もあり、彼女と慶大の花形選手だった水原茂選手（後の巨人軍監督）とのロマンスは新聞紙上を大いに賑わせたということである。

この球場の痕跡は残念ながら現在全く残っていない。

さて、もう一つの慶大野球部合宿所であるが、詳細に検証してみるとナント当社（聖電工業）の目と鼻の先にあったことが判明した。

もとより当時の建物が残っている筈もないが、敷地の様相がそれらしい面影をとどめている。毎日その場所を目にしていながら、今日まで気づかなかったのは迂闊だった。

記録によると、グラウンドも合宿所も 1941 年（昭和 16 年）には現在の日吉キャンパスの近くに移転したことになる。それにもかかわらず昭和 30 年発行の地図にその表記があるのは、戦後しばらくの間そのままの状態で放置されていたのだろうか。

残念ながら、今のところ当時の様子を知る人に巡り合えないでいる。

以前当社の周りには小さな工場が沢山あった。しかし今はマンションや住宅がそれにとって代わり、風景も変わってしまった。

日本の高度成長を支えたモノづくりの根幹をなした町工場は姿を消しつつある。

時代の流れと言われればそれまでだが、一抹の寂しさを感じる。

そんなとき古い地図を眺めながら、往時を偲んでみるのも一興かもしれない。

筆者：聖電工業株式会社 斉藤 博